

21世紀瓦版発行についてもう一度自らに問い返す

21世紀瓦版のパンフ「3・11〈から〉の発言」(一)の発行に伴って、180号に文章を書きましたが、どうも書き足りなかった気がしています。そのときはほとんど意識していなかったのですが、本当に書かなければならないことを書いていないのではないか、という思いがしばらくして突き上がってきたのです。それは、どうして私が自分でも思ってもみないほどに3・11に固執しなければならないのか、と考えたとき、私にとっての3・11ショックが思い起こされてきたのです。3・11が戦後最大の災禍であり、かつ日本列島初の未曾有の原発事故であったことによるショックではありません。当然、それはショックなのですが、私自身を根底から揺り動かしたのは、戦後60数年間を生きてきた私の視野の中に全くといっていいほど原発事故はもちろんのこと、〈原発〉そのものが収められていなかったという点にあります。ここで〈原発〉とは単にエネルギー問題にとどまらず、〈原発〉的体制を不可欠とせざるをえなくなっている現代の科学技術文明～社会構造を指しています。

私が〈原発〉にほとんど関心を向けなかったのは、関心をもたなくてもよいように仕向けられていたからなのです。いかえると、私自身が〈原発〉に関心をもたなくても不都合を感じなかったということです。いうまでもなく3・11以前にはソ連でもアメリカでも巨大な原発事故が起こっていたし、日本でもあわや大惨事といえるような原発事故が頻発し、その都度報道されていました。それでも気に留めていなかったのです。パレスチナ問題や日本人拉致問題、さまざまな多発する社会問題には過剰に関心を向け、文章も書き、他の人からは広範なテーマ～領域を網羅しているように見えたかもしれませんが、不思議なことに〈原発〉問題だけはほとんど取り上げたことはなかったと言わなくてはなりません。〈原発〉問題に対しては眠りこけていたのです。

おそらく3・11が発生して叩き起こしてくれなければ、〈原発〉問題に対する私の熟睡は続いていたにちがいません。〈原発〉問題に私が関心をもたなくても、3・11のほうが無理やり私(だけではありませんが)に関心を抱いて、私を〈原発〉問題に目を向けざるをえないようにさせたといえます。こんなことを言えるのも、私が直接的な被害を被らずに生き延びることができているからですが、3・11によって私にとって最も関心の遠い問題が私の頭上に振り下ろされたことから、私は次のことについて心底考えなくてはならなくなりました。

一つは、〈原発〉問題以外にも私が眠りこけている歴大な問題が、本当は私のほうに押し寄せているのに、眠りの中で気づいていないのではないか、あるいは、気づきたくないために眠ろうとしているのではないか、ということです。たぶん、両方だと思います。覚醒しているつもりでも、眠っているのです。自分で自分を叩き起こしつづけることにどうしても限界があるなら、せめて自分の外から叩き起こしてくれる事態に対しては、自分の関心を最大限ぶつけることが要請されているのでしょう。

もう一つはそれとも関連するでしょうが、〈原発〉問題に対して眠るつもりはなかったのに眠ってしまっていたのは、やはり眠りこまされていたということです。迷信や占いに左右されない私は「空気」にも支配されないと考えていたのですが、3・11に直面してそんなことはありえないことを気づかされたのです。「安全神話」にどっぷりと影響されていたから、関心をもつ必要もないくらいに安心して眠りこけていたのです。なんのことはない、「安全神話」が起こす「空気」にまんまと支配されていたのです。このことは私にとって天地がひっくり返るほどの大きな衝撃であって、私はしばらくのあいだ茫然として、気を失ったかと思えるほどでした。なぜ、それほどの衝撃であったかといえば、戦後を生きる私のものの見方が根底から否定されたのを感じ取らざるをえなかったからです。

この衝撃について説明していきます。私の世代を含む団塊世代の親の大半は戦場を体験した戦争世代ですが、私は戦前を生きてきた戦争世代の親たちを心の底でバカにしながら育ってきました。戦後の民主教育の影響もありますが、一言でいえば、なぜ負けるに決まっているあんな無謀な戦争を行ったのか、ということです。どう考えても、物理的な戦闘能力において比較しようもないほど強大な資

源大国のアメリカと戦争をしたことが信じられなかったのです。敗戦末期の竹やり戦法に至っては悲惨さを通り越して、滑稽としかみえませんでした。私たちの世代は1960年代末の大学闘争や、連合赤軍事件にいきつく武装闘争にまで手を染めようとした過激な要素を潜在させていましたが、その根底にはおそらく戦争世代の親に対する反発が根強く横たわっていたにちがいません。

その反発を言葉にすれば、自分たちなら、国家に動員されて負け戦のために自分の命まで捨てるような愚かな行為はしない、ということになるかもしれません。私についていえば、「不敗神話」や気合いや精神統一で戦時の難局を乗り切ろうとするような、数多くの戦争スローガンに日本人全体が熱狂して呑み込まれていく戦時下の「空気」支配の猛威に誰ひとりとして立ち向かえなかったことに、冷やかさを抱きつけてきました。なぜ「空気」に支配される前に合理的な判断で対処しようとしなかったのか。戦争は「空気」で行われるものではなく、理性的な判断を組み立てながら行われなくてはならない、戦争の狂気状態においてだからこそより一層理性的な判断が求められなくてはならない、と考えていたからです。

戦前の親たちが「空気」に支配されて敗戦一破滅に突っ込んでいったようには、戦後の自分たちは「空気」に支配されて生きていくことはありえない、という思い込みがしかし、3・11によって打ち破られました。戦前の「不敗神話」は戦後の「安全神話」に取って変わって、戦後の私を支配していたことを思い知らされ、戦前の「空気」に支配されていた親たちと戦後の「空気」に支配されていた息子たちとは紛れもなく正真正銘の親子であり、戦前の親たちよりも戦後の息子たちのほうが親をバカにしながら、親の敗北からなにも学んでこなかった点で、はるかに大バカであることを告知されることになったのです。鳶が鷹を生むわけではないのに、自分は鷹だとうぬぼれてこれまで生きてきたことがたまらなく恥ずかしくなり、3・11以後心を入れ替えてもう一度、これが最後だ、と言い聞かせながら自分について総点検してみなくてはならなくなったのです。

自分はそうならないし、そうなるはずがないと思っている人ほどそうなりやすいということが、私にも見事に当てはまったというしかありませんが、よく考えれば、戦前に吹き荒れた「空気」が戦後になったからといって吹き止むはずがないでしょう。「空気」が敗戦したわけではないのですから。日本が台風の国であることとどのように関連しているのかわかりませんが、日本は「空気」支配の国でもあります。「空気」に支配されてなにかが行われていく社会であることについて、日本人は真剣に考えなくてはならないでしょう。3・11は私たちにそのことを伝えつづけているにちがいません。その3・11からの伝言をしっかりと受けとめ、私と共に眠りこけないようにするためにも、この瓦版を発行しつづけている、ということを読み取ってくださるなら、それ以上の言葉は私にはありません。

『「空気」の研究』のなかで山本七平は、戦艦大和の出撃を支配した「空気」についてこう述べています。大和出撃を無謀と断ずる明確な根拠があるのに、そしてその根拠がもう一つの論拠によって打ち破られるわけでもないのに、大和出撃が当然とされていったのはなぜか。《その正当性の根拠は専ら「空気」なのである。従ってここでも、あらゆる議論は最後には「空気」できめられる。最終的決定を下し、「そうせざるを得なくしている」力をもっているのは一に「空気」であって、それ以外にない。これは非常に興味深い事実である。というのは、おそらくわれわれのすべてを、あらゆる議論や主張を超えて拘束している「何か」があるという証拠であって、その「何か」は、大問題から日常の問題、あるいは不意に当面した突発事故への対処に至るまで、われわれを支配している何らかの基準のはずだからである。》

戦局を有利に展開するために大和出撃が論議されたのではなく、無謀であっても大和を出撃せずして戦争は終われないから大和を出撃させるという主張が議論を制し、昭和20年(1945)に沖縄への特攻作戦途上、なんの活躍もせずにアメリカ機動部隊の攻撃によって撃沈され、2500名近くの乗組員が大和と共に海の藻屑となって消えていきました。私には今回の原発事故と戦艦大和の最後とはダブって映ります。「空気」支配の行く末を、戦艦大和も福島第一原発も私たちにその惨事を大きく拡大して、目に焼き付くように提示してくれている、と思えてなりません。